



長谷寺 本堂舞台



室生大野の里を行く

あを越え伊勢街道(初瀬街道)

あを越え伊勢街道の概要

大和と伊勢を結ぶ道は、古代からあったといわれている。それは伊勢志摩の新鮮な海の幸を大和朝廷に献上する贄の道であった。壬申の乱(672)の際、吉野宮滝を発った大海人皇子一行は宇陀を経て宇陀川沿いを下り、その夜名張に着いた。この後、伊賀の柘植から鈴鹿の関を通り、北伊勢では迹太川(現在の朝明川または米洗川)のほとりで伊勢神宮を遥拝し、戦勝を祈願した後、美濃から近江に攻め入った。

勝利を得た大海人皇子軍は、帰路もほとんど同じコースをとり、9月12日に飛鳥浄原宮で天武天皇として即位する。

天武天皇は伊勢神宮に対する崇拝の念が強く、娘の大来皇女を斎王として伊勢に遣わしている。斎王とは神宮の祭祀のため奉仕した未婚の内親王・女王のことで、天皇の即位時に占いで選ばれ、その天皇の一代の間の務めを原則とした居つきの巫女のことである。

その後、大和から斎王や勅使が賑やかに伊勢へ向かった道が、大和からは「あを越え伊勢街道」伊勢からは「初瀬街道」と呼ばれる、現在の国道165号線沿いの道である。

あを越え伊勢街道は、桜井市初瀬から宇陀市榛原萩原の札の辻で伊勢本街道と別れ、名張・阿保を越えて松阪市六軒町で参宮街道に合し松阪・伊勢に至る道で、高取藩の植村家(3万石)が参勤交代で通過。初瀬宿には本陣、三本松

宿には藤堂藩支配の本陣と茶屋、名張宿には本陣・脇本陣・問屋などの町制度も承認されていた。

江戸時代後期から参宮客で賑わったあを越え伊勢街道も、鉄道の開通により徒歩での参宮が激減。街道も国道の新設や鉄道の架設、団地やゴルフ場の造成によって消滅し、その一部が里道として残るのみである。沿道の宿場町には、現在も伊勢参りの講札や常夜灯が残され、往時の賑わいを伝えている。